



七部集大鏡

炭俵六



炭
俵

炭俵

信濃何丸撰釋

● 尾の窓をひらき心の泉を汲

一書ふ云僂相めう白ふ朝用尾窓夕汲心泉

一書ふ云莊子曰原憲居魯環堵之室茨以

生草蓬戸不完粟以為糶而甕菽室褐以

為塞

● 十ああり七の文字の形風

愚考形風を形考を卑下していつふ

初まり朝野とてはつきり胡多胡庭の

養野を郊外の養なり

● 宋人の不龜らんといつる業

愚考火桶ふげし炭をたこすを子の

のくまらんといつる業其家の白ふを左好

意を不龜夫此古事なり莊子曰宋人有

不龜を業を以て海畔統を事客

字を讀賞其方百金聚族而謀曰我世

為海畔統不龜數金今一於而鬻投百金法

与之客は之を以て説吳王越有雞吳王使

之將冬与越人一水戡大敗然人裂地

封之能不龜乎一也或以封或不免於

海畔統則用之矣也

● さしくまらいつる物の目書のめ

一書ふ如修の初うのめあるのめさしく

まらいつるめありてと云い 愚考伝列の

疏英を鶯の目とりて上あし守出羽の
旅英を鶯の目とりて上あし守出羽の
吹しりて大うはりのめきしきるをなめ
てうくりしとらや

有厚の強をなやとら

成美曰宋僧洪覺範石門文字錄云宋迪
視八境絕妙人謂之無聲白演上人
戲余曰道人能依有聲画乎 愚考
王維曰詩有厚画畫無聲詩又曰王摩詰
の画を画中よるなり王六告り詩ハ詩
中よ画なる

詩の正義ふりつる五ツの品

成美曰毛詩正義曰名篇之例義ハ無定
準多不五少終取一或偏拳兩字或

全取一句偏拳則或上或下全取則或
盡或餘亦有終其篇首撮章中之一
言或後都遺見又假外理以定称

なるまやまの巻くの類ひふ
あるあねと

一書よ自和秋の五段篇序歌曲流

例の口ふ任きつるよるなる竊ふ

よりの所あり任るるる

愚考竊ふよるなりとる例の名體家用
教の教号五章の義なり待秋の五義をた
るまじていそよよはよよとりの義なり
次よ叙す

くぬきて炭のうら秋を拵編

成美曰擔教寺醉醒集よちきりなる

やちりめ深山のり〜なとるりめる
ねやの燈火

独あち〜をわさすりて略
歌号おのほ〜ひ〜けり

愚考 寂の独云を留てそ建を歌号と
すら別教するり歌号歌備よ合せて見一
梅うまよしの花と月の出る山函ふま

古注よ流き歌るより〜白中よ夢の
字よりるる事とよ長なりよきり〜
ホを〜歌略の法〜やりよ一き枯南々兼
菴の宿よ暫付電載花幾如葉沈波
又林木靖々梅の宿よ横斜疎歌水液
涼暗と浮動月黄昏の作事よを歌を
い〜〜で吟をそとあり〜は歌略

の法るり 愚業為歌傍歌とりよ〜
略の法〜め何そや歌略互歌とを祖
翁の白よ郭公正月を梅のらるるり
きよ不〜き寸の白るりる意を郭公を
る〜鳴ぬそ正月梅の笑〜時を著う鳴ふ
い〜花う〜ふるりぬ〜
〜や〜〜不〜す〜
きハ梅よ卯花正月よ日月と皆その時
の系物をも〜け合と〜り時をよ
れ歌を略〜梅よ卯花を歌よ略〜
るり余考の歌よて余考を歌とりよ
や何る〜空よ〜
歌略といよ法るり〜歌略互歌とを
い〜一〜歌を略〜互よの法

るりのは不奪胎の白法換骨の白法るとは
すの人の有りいり心ゆていりまのりりむ
是の胎を奪りて骨を換るゆ一は不奪胎
換骨といひは摸写奪胎とて写し摸して
態を奪るの白法なり錯綜特例とてまう
みりて遊例すといひの白法なり
ひてといひあすはくろれり

一書ふは改のりふ通くは袋の尻は白法の
曰ふふらよりかよよまのちとて老中
うくゆとときさまは河海の細流を撰るに
といてむむる老合らりといて通むよりよ
いと事下といひは遊例の金言なり 成美曰

康園紀亨 振四年正月九日今曉室町
康園延望也 正袋大鼓去庫取く殊云

愚考後名目云母を飾ふるそらるるの胎
中ふその子籠まある時飾の中ふりのく在ぬ
ふ飾を六めてしきりふまふてヤ飾と
山傍園終云俗称人母袋と云蓋胎胎之義を
取矣又曰豈不古きを袋と云摸ふ古きを包と云
初層ふ袋掛下地 委て 見え
はゆをおふ居合 一ぬき

一書ふ飾りて居合をぬくといひるるを露を合
ふふといひる甚奇と 愚考四の端立の用
意もて受うけざるふ露の潤ををうまうて飾る
るりその主人又終りて障子列立入る白法も
血氣の美 堂目以るむ雨の居合を露
墨りていりぬき ぬき ぬき ぬき
紋しる佛と居合のりを 紋術者林

漆を依とりしものより始るとある

・ 木あやこふ書物のいきまを遊具

愚考きき親の例あるもの東風く時るのる
五月るのる山流の地今朝の朝意あこ
心好るき人あやこふ思うらあ改ふ
中城後の山家まで今朝あきけとりし親を
けりしよあふ人あまはりの人あやこふ
初午ふ女席の親子あまふて

成美曰親子とも我層のるりて親と子
とりしよあふあやこふ中必の俚えこ云

愚考きき山ハ親子ともあやこふ親子と平ふもの

・ 惹好の遊減りり親さくあ

成美曰双星中巻才子寂閑りら合松丸を具

してあこらひりかすはりりかす遊ハ世の
産さくしてあこらひりかすはりりかす遊ハ世の
ものして遊やうのものをあこらひりかす遊ハ世の
き 愚考惹好もト新姓後宇多院崩
後途世和歌口を王の一人るり伊賀國
見山林中井莊小卒寸心恒の産るを
ハ恒の心るりといふ是子の教るり

・ 何とみや昔よ親能を

一書ふをくき昔るり廣樂るりこ小珠
の子出の卵るり考はるり考はるり考はるり
あるはるり遊ハ世をえて子ふあこらひりかす遊ハ世の
ふ白き出の子あまはりのを親すといふ
又土桑家の料理よ親能といふものあり
捨て貝の身りりしの子供をそくて暮る

くはりし 形るなり

金傳の細きは是をさすなりらむ

此のいふいの小なる みるなり

愚考傳灯録曰才一祖述善ふ世考入滅涅槃
樂如系至双林樹間悲哀踰泣傳於金
檀肉現双足又曰宝物集小大印匡衡昔切
利天之安在九十日刻赤梅檀而摸金
容今跋提河之滅後二子年治紫磨金
面乳兩足一これハある次の背ふいといの
小なる路よりなる涅槃樂の傳入元あるな
ふへ

空豆の花咲ふなり 妻の縁

愚考大和本字曰近年吳玉よりあるゆへ
ふ西玉よりあるゆへと云ふ其実空豆

向ゆふ空豆といひり八月をぬを抄る
目録或る高下或る田るをいはるりて
よく并のらと云く

子も裸父もててきて早苗舟

愚考いふるゆへ 去白ふさく

愚考杜子美南系久客耕南畝北足傷
神斗北窓一帯引老妻一乘小艇晴看稚子
浴漢白俱飛樓城久相逐 五 蒨 芙蓉
本自双若飲蔗漿携所 有 空 甕 无 附
玉為缸 又古歌 小舟の みる夕歌 柳の
下すも舟 終るてきてて女をさすのりて
愛る服とて 一侍歌のまこと ぬもりのり
を蓮よりして 咲ふ歌を夕歌よりして 優
しいる 見る 依 借 の 良 林 あり 蓮 あり 夕

教も向きよふ所達ハ志向ふさうと云ふを
しりぬのるりるる裸父をとりしりよそて老
書る抄のりりり中よありて達ハ禪有り
下等るり

ちいめきの中より出するんたあ

成美曰さうめく憎めくの敷一してみきハ
ちいしめくるる一そそそそちめき
寸みそよむり又云るの餅よ何よ小を
入て持運よ竹筆の各目るり
又よまぐめきと滑りうはのそ阿達ハ盤時よ
予を定めぬ

松坂や矢川よたのり裏通り

成美曰許六南形元松坂の矢川とり
と人の面白うりあるりそ亦先府よ同
ハ今を統て只の西ふるりしりし美よ此
烟よよりて見まハその以持母のありは
るり一

十二之年の衣裳の 打掛

本堂はし一不考ととるし

宗徳堂曰糸の衣裳を児の腹るりし
思集沙の白よ本堂をとりしりよ西ふるり
りて児の腹とりしりよやそそ必年友の長を
指るりとの腹るり一一年をた大年右天年
左中年右中年左少年右少年及年右人
政善後友山と七年よの和よ南曹年と
りよありそそ春日無後与多武家と
んり別り毎ちるりりそそ達ハは所南曹年無
福中るりり造りよの併よ必をとり

只素の繋きよふにすく 水

・ 通にぬのうらの詞を歩妙て

一 味曰素由りぬ氷の紙よ古ふ灰汁百く
水ふ濁りるる音岸 少法留をふらよく
うらの詞をたけよふ云くはうらの詞とりよ
音曲系よそ厚の表裏をひよふまは
さふらよそ厚の表裏をひよふまは
そりよふよそ厚の表裏をひよふまは
ふよ律はよそ厚の表裏をひよふまは
美る氷の素の繋きよふにすく 彼紙の文はよ
すうらて附しよふのるる 愚考六律を表
と六律を裏とてそを十二律といふ
律はよそ厚の表裏をひよふまは

初とる長をりよや字彙曰るる陰律入

て旅るりよ心を陰氣陽氣を旅助す云こ

まこ旅伴の情よよのるるひるむや 著書曰

伽嚮を俗後有り通にぬ車よそをよそ

れよとりのるるを約んといふやよのをゆら

らあちよとりのるるをうらの詞といふよ

・ 舞舞の系よよのるるひるむや

成美曰る轉クルへきは驚たをカセリとも

りよ又マヒハよと云るり方云のひるりよ

ぬりのるるまよとりのるるや東よよをクルへき

・ 切蟻の喧倒 極多と云

愚考地中一すよ飛てすく極多のやら

りよよよりの喧切てを地中よ隠れ飛る

為るよよと出るり北越よそヨトといふ

瘧 目をもちてうつりせしむ 瘧心
考てすけしむり 瘧の字しき

愚考乃時お急曰瘧鬼曰不能病巨人故不
壯士瘧を不病と晋人曰君子を瘧を不
病蜀人瘵瘧を以て奴婢の病と守宗
よ其のて次し下結の瘵病の志瘵を是より
起るの病るなり

此は連名の名をいやはふ平 与り

愚考乃連名を專主るなり夫をいふ平しげふ
よひ思ふ 瘵病の強なり 樂天友の詩
よ云友花紫蒙茅 友をよま 杖疎徒
謂好教危而る害有餘 中略又如妖婦人
綢繆盡を夫奇 邪壞入室夫惑不能
除去の詩の心をえて二百の働とす

常の月横小負某り 古 柱

きいきの長いあるふあつてい
ひはそりと益とるての降古也

愚考乃高路去はていを牛としりよる大も非
るりまらていといし約牛もよよるはすし
たきまらりの小對しり といふ大の字の次は小
はくしをまらてい牛又をやらつてい
よ成く南人の娘もあつてい小成く或を梨
樹はよよるい 牛はてい大の胡蹄とハ
牛もよよるい牛も男牛と只一高小人のを
よはあけ牛と心はあつてい久し 全作
附白りよるときりゆつるり横小負某り
柱を横しよるを白編のりよる次の後を
いき畑々両方よるゆつる身を横しりて

禪は
悟り

禪統統接なり自然法を勝ありとて一化法
を契ありと守るを立宗の三義とて一又
天台とて天台山を以て開く宗とあるは約
憲の義ありま云とる密法の家ありとて
一約法の義あり佛心とる新説新儀を教
を以て教也何人そ我何人そ心悟心を
以て号と守又禪とて一禪を无心統想ふ
して禪の心あり三義佛舎律い法也
亦初の法あり淨土を以て宗とて立
て弥陀の名ありを三昧するは生起
の義あり釈とて一くる大徳小徳を以て
むす一守るは佛性なるのよの弁當來の人
ありていま必半とありて一
一守て一守るは佛性の根

負ふるさかしの附ありとて一守るは
を以て思ふありゆつて一守るは東
涯の乗燭譚曰柴微宗帝宗寧中居
養院漏淨園を以て困窮の者をすく
注昔世上一小儀を以て曰不養律見却
養を思ふ不養活人只養死尸とて云く乞見
を以て思ふといとて一守るは心
を以て思ふを本約の心悟へして思ふを
と守るは一守るは百善の中の一を以て守るは
とて次の寺を以て死尸を以て養すよて
らとの守る人あり執一とて云寺とて守る
ゆすむつきを淨土とすらるるは守るは
淨土とて守るは守るは守るは守るは守るは
守るは守るは守るは守るは守るは守るは

新秋新のよ悲しむる鬼神の要所まゝ
その新のよをよとていふるを忘るる紫磨美金
をよとていふるをよとていふるを忘るる紫磨美金
其の長月をよとていふるを忘るる紫磨美金
うむし一果するはちのそら
成美曰契伴云云云云云云云云云云云云
云屈のう子の着を和使うるをさのいふる
愚考一本うむしと書るを非るなりうみむ
しうむむの防同く果するさりの物しと
むし物のみこいさるる年中あまは雨を司
るまの戌辰午丑亥の子よ入亥の日あり
うむのる日を免ていさといふ

遠葉よすともや伴物の新まゝ
古往曰秋又ま古の候りうもあまの伴物
とゆるま元日の式の今候るる神代をた
りい出で候時とやと道祖神のいふや胸中
をささるるいさるといふる候り候るといふ
のあまのいさるといふる候り候るといふ
うむしとていふるを思ひ出で慈徳和尚
の初よとていふるの一字を吟し法澤の
うむしとていふるを遠葉よ對して結ひとるる
慈音秋よとていふるを伴物よとていふる人
はまて候うまゝとていふる花掛子のま
みらのくのくのもう関歎む箱の海元
海味堂曰仙臺金花苑山の棟より 正月十五日

天子一云尺の海志を貢す」と云く 抄言口
後拾遺集よ何れをの海の名古昔の国を
何れものをいふや其の越て是れららむ

まや折く丹波の鹿の海のとて
一書よ平家御後よまやうの御を鹿をまよ
り成すとこのよひのまらよま暖よまらひ
子の海きよみ心とてらりまの鹿を丹波
一越えまらるるにまらるるに雲のありとて
丹波の麻をまらるるのよま一越えひ

いそりまを寄の ままらるる
五味堂曰このまらるる 縫袴とてや袴の歌
まらると云く 成美曰成る紙よ田舎家木の
まらるる袴の小袴衣をまらるるに
思ふに何袴よまらるるに

袴まらるるに寄るに奴隷下郎の比喩を
変比を彼をまらるる此よ状す蠢斯縁衣の敷こ
来子曰引物為説者ことまらるるにやまらるるに
よまらるるに表衣をまらるるに柳の袴を
引くけしといそりまらるるにまらるるに
勤のまらるるに柳袴のまらるるに
よ柳の装束のまらるるに柳の眼をまらるるに
資道付物記曰柳衣老母の胎内よ冠し
血中よ住五位を越て出現初て佛法終
初よ越く父母の慧をを報し 流生を
利益せむとすゆふ血相を表して赤
色よ染をまらるるに寄るに比喩を
まらるるに寄るに寄るに寄るに寄るに
よ寄るに寄るに寄るに寄るに寄るに

よ花見え新あり花を 是皆下郎奴隷の
比喩ありと云ふべし

・後世にや木若の自らの核を
愚考の本若を核の多きよふそこのより造り
せしむる方ありと云ふ也

・従いしき道門徒城のの水を

いさしき道門徒城のの水をいさしきと云ふ

・愚考のいさしきをいさしきと云ふ

・イトム イサニイサニ 等あり 活法曰性之勇

・白心也

・本日新書 董まこと 活法曰性之勇

・一書よまきの花のくくくくくくくくくくくくくくくく

・花の妹よ花をいさしきと云ふ

・核一本はまゝしきの花あり

意味堂曰はまゝしきの花あり

・よそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ

・核あり本ありとすのよそよそよそよそよそよそよそ

・活法よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・よ核あり娘すすすすすすすすすすすすすすすす

・一書よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・いさしきよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・めくよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・いさしきよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・いさしきよよよよよよよ

・と云ふよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・一書よ七種のよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・と云ふよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

・唐ちのよよよよよ

あつた
七種
一ナリ

大原や梅の影てあふおちる月

愚考後撰送集よふと画してや月さうら
ちり心大原やおちるの影あふるき春はくらの
大原あふ北山あふり

愚考よ葉をいひ心あうの文

愚考近枝集よあうの文とくちあやしき
るよふあうと云く

愚考の一考よ急んを入よきり

愚考杜子美便考考決大丁寧

五人技持たてあうの梅うら

愚考ま木集山里をさうらうのあめ
塩技持する人もあうきとあうき又続續
簾の白くあうの花や飯米五十石思ふ
よ芒燈を技持する人もあうきとあうき

と述懐し柳を五人技持位の人の産を
ようくいさうり梅越よさうのあういさを
うー又梅を植て五十石の産除よ松
枇杷るを植てあうの産の産しし
殊よ此柳を五斗米の五をゆりさうて
柳のをんも心あうしよ五をのりさう
て五十石の梅も又芒白をもちてるよす
の法あうのさう

花書や白きいりらを突合せ

弁坑曰白氏文集二月五日花如雪五十二人
頭似霜

新あいの湯を斤勝や産の花

愚考正宗よ曰新花夕月世家と云く
あうの夕飯あうのあうの人心を利りる

見えぬ

柳の装束ゆすり重なる花の守

愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守

流母を花よ珠散らすの姿

愚考 柳子紙よ重なる花の守 愚考 柳子紙よ重なる花の守 愚考 柳子紙よ重なる花の守

早知ふ小川のありて

愚考 古今集念食うく吉備の中山 愚考 古今集念食うく吉備の中山 愚考 古今集念食うく吉備の中山

一書ふはくしと

愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守

くろくしと

愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守

自然よそのす

愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守

柳の装束

愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守 愚考 柳の装束を重なる花の守

● 尋や竹の子藪よ心を移く
一書よ志き病蚕のつりき白氏文集の依
例よるり入と云く

● かとさす一二の橋の夜明が

一書よ江戸本一ツ目二ツ目の橋を一二の
橋と云ふまゝなり則經尺を一ツ目の物
某所おるなりと云く 一説よ一二の橋を
澄よありそのおるその依るなりと云く

● 愚考は漢よ一の橋二の橋三の橋と云続け
つてさすよハ一橋のありのまゝありハ字小掛
境の物き一三の橋よての目も及ん
流橋の系色するむのの漢をわき守
の系物あるまハ漢の方籠らむよやい
よハ橋一ツの志あるなり一ハ未志あるを

さくめよ

● 木々これて葉はみもきくや郭公

古注よ曰人志まゝ大円山の山を本よき
ての舟月を思ひつる此歌よよまのり

● 愚考その歌改の歌を五文字の舟よ一
てさくめよの意よ味一ハ人志をわきえ
やハ思ひつる神外記の陰よ、これ後
撰集よ木々よきてさくめよまのり
と云ふすまのりよ、一ハ枝うほりま
又大わりのしりよ、まのりよ、まのり
やのの情を本よきまのりよ、まのり
をまのりの意を葉はみ舟の人の本よき
てはると云く、さくめよ、さくめよ、
柳寺よ麦穂いよ、や竹のえ

成美曰吾儂國原見教立政寺也於十
五石信入抄寺と稱す國々系御跡の時
此寺ありて 神君入材を献じ是より大垣
々々入入しと稱す 又の後小
百目抄といひ

又の多くは上りり 糎五把

一書入抄院より定子の方へ多しをのり
入五寸斗の弁挺くをのり杖の形も改
色するくして山橋目つけ山すけをさうつ
らしくさるるはゆえを有し 成美曰糎五把
おぬすりといふるを貞徳ちりき山ありは位
飛宮ありていふくひをさすころそすくをり
既ちちあきとてさし毎の字をさめてたゆす
よあり 愚考貞徳を唄いほまはる集外三十
六歌仙のりる事述いさすまふす

きく一書をさのたははまやはのちりき
既ちちあきとてさし毎の字をさめてたゆす
よあり 愚考貞徳を唄いほまはる集外三十
六歌仙のりる事述いさすまふす

一書入抄院より定子の方へ多しをのり

一書入抄院より定子の方へ多しをのり

一書入抄院より定子の方へ多しをのり

一書入抄院より定子の方へ多しをのり

草木の
有る山を
岫と云ふ
草木の
有る山を
岫と云ふ

何ぞ不らげあり

子乙女ふくしてまゝる菜飯の形

愚考天恩太神然人の事りし一雨の五穀の穂
を天獲田長田入植多ひしよりの田植の事
を女の業ふありしよし子乙女とよみ

とく山や人をすまふ女生らるるあり

愚考山の子本ありを岫山といふ字本あり
を岫といふ

竹の子や鬼の歯らるるうはらき

成美曰保氏の借換留止ものたし出らふ
あてむとしてありしをを借とよみしあり
ことしはらきとよみしをを借とよみし

杉雲を産て居てまゝやまきし

愚考柏玉集ふらるるやうにけりしをを

つすまはるる産らるる軒のちやあをまむ

明月や不二見ゆりつとすりし

愚考り明月名月と書しつとすりし
一不二居士不そふ義二婦をて思
士峯三上山等の吳名所の富士を八葉
師嶽親善嶽地産嶽淺間嶽大目嶽不動嶽
阿弥院嶽新迦嶽を有る

能くかやまらるる産らるる門の垣

愚考道思録曰有る人三事不順天付故
日团团云て帰去来の辞ふ門新後出因云
於团团の辞ふゆはら又世に竟夫团团後
を例かきし

てしりなると新歌をりし柿下

一書ふてりなるとりふ五ふ子の書は得こと

實桃の皮を煮みわきて蜜を出し
て煮るの汁を煮る煮るの汁を煮る
煮る煮るを煮み出す
煮る煮るを煮み出す
煮る煮るを煮み出す

お撲取の皮を煮みわきて蜜を出し
減美曰古分抄の皮を煮みわきて蜜を出し
煮る煮るを煮み出す

葺 猪や荻 撃つと見らるる

愚考 本草曰山中ふ叢生して其色多り
根を煮みわきて蜜を出し
煮る煮るを煮み出す
煮る煮るを煮み出す
煮る煮るを煮み出す

とつり

● 庵丁の斤袖そりし月のふま

愚考 庵丁の斤袖そりし月のふま
を煮みわきて蜜を出し
煮る煮るを煮み出す

● 春服 蜀 彼 湘山 幾 斤 雲 の こと

成美曰和名 抄漢借抄云 新 冠 兼 度 利 佐
加能利 又 延喜民部式 交易 雜 鳥 坂 廿
五斤

● 南宮 山 少 訪 て

成美曰南宮 山 少 訪 て
愚考 美 濃
西 不 彼 邪 社 考 曰 後 府 中 少 訪 人 後

又那の南伸山より移す故より南宮と改む
平将門の野能て法より入時此神矢を放し
その跡を射りゆき小佐矣路^{カウ}首^{ヘン}宮と稱す
ちこそる神金山彦命と又伴賀^カ命と南
宮山あり同一体と云くを枕隣の本宮と
やうなりし要^カ流^カを一宮とてを松皮^カ宮と
と同玉の無流^カを二宮とて流^カ宮と稱すなりや
・草・鳴の殿つらしなり神志なりき
一書小徒然^カ字よ三哉院定^カ款^カ傍^カ都^カの如
く草はありなりいありその神志なりき
・芭蕉翁を秋草屋よまぬまて
・のらぬをとしつるをけりよ子の香
愚考^カ撰^カ集^カ抄^カ曰^カ西^カ行^カ上^カ人^カ口^カの里^カを
りありしよむらむるれをけりこて人の

門より互やせしむる内の力を入あふよるの
危志らまのりなりをよむて板一枚をけり
らしむるなりをよむて板一枚をけり
ははらら入被^カ厄^カ元^カ阿^カ乃^カ月^カの建^カる方
ましおのりよまると附^カ殆^カりよ人^カおめて
夜一室して連^カ歌^カしありよるのよむの
あらうとのりておしよむらふよまを
ありし増こ

藤原の志

・小夜志らまは藤原の白をひき止め
愚考^カ蒙^カ求^カ曰^カ愁^カ康^カ珠^カをよむて向^カ秀^カ都^カ入
思^カ旧^カの^カ斌^カを^カ依^カり^カ又^カ選^カ云^カ愁^カ康^カ博^カ綜^カ枝^カ藝^カ
於^カ孫^カ味^カ特^カ妙^カ際^カ當^カ就^カ之^カ顧^カ視^カ日^カ新^カ索^カ
琴^カ而^カ強^カ之^カ逝^カ將^カ西^カ邁^カ統^カ其^カ旧^カ盧^カ于^カ時

朱の籍や依那之りくりの雲の弱
栲山曰新古今定家卿弱とて袖うら
ちるうけもさる依那のやうにけゆきの
ゆふくま

● 祿門の草 是袋おろす十夜子
愚考乃武用糸略曰草是袋一名類ワラ貫草
履を注礼るり素是をえりワラよめて草
是袋をて用や

● 白魚の白子(白の)や杖のばし
愚索白魚を江戸浦よてまきの貴勢る
之乃を大坂の人此白れを季女の先志は
庚申やうふ火煙のちるをワラ

成美曰三體待小年長骨推甲子夜寒
初共守庚申 愚考皇極天皇の御宇

唐土のり渡るといふも女帝るるの故小
初る事天智帝始て終りしりなり
又云文宝元年大坂天王寺よてほりめて
初ふとり又僧史略曰庚申舎を結ぶ
し流人言以初るり或を縁作を唱し
一夕眠らぬ三鼓をりて上帝よ奏すりて
避て罪を住し算をうらむるをゆらる
是乃家の能也

● 古の言も又うりりり一何しる
愚考乃等白集ワラあつらふ坂山のさぬつら
又うりりり言をあにり此れのをま
をるりワラ一何しる

● 古の言も又うりりり一何しる
愚考乃等白集ワラあつらふ坂山のさぬつら
又うりりり言をあにり此れのをま
をるりワラ一何しる

うき世のりりる皆淋しすきりして只名
そとぬりりり垂て親等よりとりりる名
このふ

才雅曰ち魚くさくさあきく賞て只白
ふ白くめくつとるり

・ 凡そ心やきしやとてふり

愚考舊事本紀曰以手之十箇凡為手
端之吉棄物以是之十箇短凡為是
之棄物是慎收已凡不一手是之凡
之法之元也云々拾芥抄曰丑日除
甲寅日除是甲一之七張日記曰凡の長
くるりんとて目をとのそよまはるる子
の目あり凡きくつとる新氏要覽曰

凡の長きを破戒の相あり云々 文珠同經
曰凡許も一指撥撥故也云々

・ 秋の空屋上の秋ふはるまじり

愚考之選秋無錢云天是朗以弥高兮
杜牧待小南山与秋色氣勢兩相着云々夫
秋天の玲瓏と澄のありてききるは秋
あくるるなり故ふ万木も守りてきき
の山の屋上ふまじりそらつてまじり
て何りしりみ養の制りてききまの
てふそよふつての養あり

・ 秋の空屋上の秋ふはるまじり
あはけ味増えよや向川

其外に
左の注
意を

坊して白紙す一り一六切の傳るるまじいも先注
の教坊を乳とむの多めをを草紙よのく
必ゆりうまふ思ふ一り一六本式するの母の
おまふをを二正苑りの角りやの大切の系
物るりの口傳定家にはいりてまは、花のりおまふ
形りのりの浦のりまの木の多のりまじい
らの歌のりすも念点す一り一 成美曰大井川
初章序記をををのりまのり君の代も月
九日とりひてまのり入のりまのり菊のり
おまふををいりまのり一り木のりまのり
るむとて月の桂のりまのりまのり梅のり
みまのりよのりまのり一り書ふおまのり
梅のりまのりまのり身まのりまのり船申ふ
てまのり一り成美曰字法指迷よのり

古依書よあまのりてまのりまのりまのり
まのりのり一七八斗の子のりまのり
しげまのりまのりまのりまのり
あまのりまのりまのりまのり
ひて病はくはのりまのりまのり
書けまのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのり
小栗よのり一りまのりまのり
まのりまのりまのりまのり
愚考小栗を傳字紙の物るりのり一り
まのり又選のりまのりまのり
まのり又小児のりまのりまのり
傳ををのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのり

次船をせりなを流るるとり入

こゝ心なりりと細工よ流るるこゝ

と心船のそや心のりとしりよこ

一書よ正志の元並とひりよことまこ 一説

よ小舟をよ建ハ高うあそぬとしりよことまこ

愚考の正志あるべし 正志こヤウのくるこ小

セウのくるこ西端よりして先うまふを

せしすべし

焼物よ組入をきしり 高田 新

或る河路の多田なるりとしりよ 或る大木

その介りあつてふりよりまよと菊舎らひりよ

新津よ高田の音物なるりよ

割木の安き玉のまよま

細の老道はまこ船よきりけり

星々こ見えそん 二十八日

愚考割木の安き玉とあまはき必土依と

次のるる土依沖の仲ありてちうばきこぬ

とよむし細のりよのより船のりよのりけ

考こ仲の通船の道はまこの船なる故小細

のりよのり船の考こ平日市よの宮一糸

船の考小細のりよのりよのりよのりよ

ゆの船よ船の考をとりけしり 船のりよのり

版ありまこりのりよや挽をよとまこりて十町

余も強きよ細の申をよ案切て船なるり

細のりよのりよのりよのりよのりよ

よ船ての版なるり 船のりよのりよのり

船を流よの程遠るまよのりよのりよ

春、社を經つて、麻草の上を
大鏡と見つけ、因、墨、膠、漆の
方、工、不、の、め、り、俱、お、ろ
す、人、是、月、院、老、人、の
如、上、之、考、し

中敬齋誌

